

学校と地域が連携して行うボランティア活動が 生徒に及ぼす影響と今後の可能性に関する一考察 —A中学校の例を基に—

教育実践高度化専攻 生徒指導実践開発コース 大澤 拓也

【キーワード】 学校と地域連携 開かれた学校 SCAT分析 組織の融合

【要旨】

平成27年12月21日の中央教育審議会『チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）』の中で「チームとしての学校」というキーワードが示された。この「チームとしての学校」とは、学校教員だけではなく、家庭や地域の人たちも学校教育への参加を促すような学校づくりにすることを目的としている。すなわち、社会の変化とともに生徒に関わる様々な問題が起こっており、それらは、必ずしも学校教員だけで解決することのできる問題ばかりではない。このような意味でも「チームとしての学校」づくりが重要になってくる。

本研究では、小規模校でもあるA中学校を研究対象とした。A中学校では、学校と地域が交流して行うボランティア活動が大きな特色になっている。そのボランティア活動とは、校区内にある重要文化財を見学に来た観光客に、A中学校の生徒がガイド案内をするというボランティア活動である。生徒の参加は、任意ではあるが、毎年新入生も加わり、活動の運営も学校と地域が行っている。学校と地域が関わることで生徒の地域への愛着やコミュニケーション能力を育てたり、また、居場所づくりや地域資源の活用を促したりすることにも繋がっていると考える。このような点において、今後の「開かれた学校」としてのモデルの1つとなりうるであろう。分析方法は、ボランティア活動に関わっているA中学校の教員と地域のB指導員の方へのインタビュー調査を行い、そこから得られたデータを「SCAT分析」法を活用し、その分析と理論化の過程を経てボランティアガイドが生徒に及ぼす効果と課題の整理を行った。また、ここで出た課題に対して、筆者自身の提案を、生徒の活動に視点を置き提示した。新しい活動を取り入れることでさらなる活動の発展に寄与することが出来ると考える。

1. はじめに

(1) 問題意識

実地研究 I では、学校の行事に地域の方が積極的に関わっている光景を観察した。例えば、生徒が町の情景を詠んだ俳句を、町の重要有形文化財内に掲示し、総合的な学習の時間に見学に行く活動や地域の方が部活動の指導を行っているといったことがあった。学校教育の中に地域の住民が関わっており、共に生徒の育成を行っていると感じた。その中でも特に、地域の重要有形文化財を見学に来られた観光客に A 中学校の生徒がガイド案内をする活動に関心を持った。この活動の良さは、自分の住んでいる町の文化財を地域の方の指導により他の地域の人に伝えていく事と幅広い年齢層の方や初対面の観光客との触れ合いである。最近では、A 中学校の活動が注目され、新聞やテレビでも紹介されている。

平成 27 年 12 月 21 日の中央教育審議会「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」の中で「チームとしての学校」というワードが出てきた。学校だけではなく、家庭や地域社会にも視野を広げる必要性があることを述べている。この「チームとしての学校」とは、学校教員だけではなく家庭や地域の方も学校教育に参加を促すような学校づくりにすることを目的としている。すなわち、社会の変化とともに生徒に関わる様々な問題が起こっており、それらは、必ずしも学校教員だけで解決することの出来る問題ばかりではない。このような意味でも「チームとしての学校」づくりが重要になってくる。しかし、「チームとしての学校」体制を構築していくことは、課題解決のみを重視するものではなく、生徒の育成などにも寄与するのではないかと推測した。そこで A 中学校のボランティアガイドを研究していくことで、生徒に与える影響や利点が明らかになっていくと考え、本研究を進めていった。本研究では、主に、A 中学校のボランティアガイドについて研究を進めていき、活動が生徒に与える影響と活動の問題点の整理をしていく。そして、その活動の問題点に対する提案を提示する。

(2) 実地校の実態

実地研究 I でクラス数が 3 学年合わせて 5 クラス（3 年生が 2 クラス、2 年生が 2 クラス、1 年生が 1 クラス）の全校生徒 142 人の A 中学校で実習を行った。

A 中学校の生徒の特徴としては、幼稚園・小学校・中学校と少ない集団で生活しているため、仲間意識が強い。通学形態もほとんどの生徒が自転車で通学している。しかし、同じ学校校区にもかかわらず通学時間がかなり違うほど、町同士の距離が離れている地

区もある。また、A中学校の特徴的なところは学校と地域とが密着して教育活動を行っていることである。小学校の総合の時間では、地域の文化財や町の歴史を調べる授業を行っている。そのため、校区内には有名な文化財が2つあるが、それを全校生徒のほとんどが認知している。学習面以外でも中学校の生徒が地域の方と関わる場面がたくさんあり、体育大会では地域の方と生徒と一緒に踊るフォークダンス、また夏休み期間中の夏祭りの運営ボランティアにも中学校の生徒が参加している。

だが、課題も挙げられる。幼稚園・小学校・中学校と同じメンバーの小さい環境の中で生活してきている為、生徒は自分の知らない集団の中での活動やコミュニケーションを自分から率先していこうとする生徒は少なく、引っ込み思案の生徒が多い。自分の知らない集団内で自分らしさを出せるようにすることが課題である。

(3) 実地校のボランティアガイドの概要

A中学校の生徒のガイドスタートは平成23年からである。平成23年、1年生の総合的な学習の時間として、調べもの及び見学を機に同年の夏休みにボランティアガイドを募集し1年生の6名が参加しスタートした。そして、勉強会を重ね平成23年11月23日に一般観光客へのガイドを開始した。その年から毎年任意で募集を募り、現在(平成26年)では3学年男女合わせて16名の生徒が参加している。活動は月1回で、夏休みなど行事がある場合は、月2回行うこともある。ボランティアガイドの活動は、部活動ではないため、原則部活動が優先である。そのため、現在ボランティアガイドに参加している生徒の半分以上の生徒がテニス部所属であるので、テニス部の試合がボランティア日と重なっている場合は、かなり参加人数が少ない時もある。また、最近では英語でのガイドも始めている。英語でのガイドは、A中学校のALTの先生や英語の教諭が指導を行っている。現在は、英語でのガイドがボランティアガイドでの大きな特色となっている。

(4) ボランティアとは

ボランティアについて厚生労働省が出している定義では、「自発的な意志に基づき他人や社会に貢献する行為」を指してボランティア活動と言われており、活動の性格として「自主性(主体性)」、「社会性(連帯性)」、「無償性(無給性)」等があげられる。¹⁾のボランティア活動には主にこの3つの性質があると述べられている。

さらに寺山は、「1995年1月7日に起きた阪神淡路大震災で、多くのボランティアによる救助活動の様子がメディアを通して伝えられ、『ボランティア元年』『ボランテ

『ボランティア革命』などという言葉を生んだ。そして、以降ボランティアへの関心に繋がった²⁾』と述べている。自発的に他人のために貢献したいという姿がテレビを通して私たちに伝えられ、現在のボランティア活動に定着していったのであろう。このような影響を受けて、教育現場もボランティア活動を注目するようになり、平成20年度版の学習指導要領から初めて、「ボランティア」という言葉が載るようになった。ボランティアという用語は特別活動の中の勤労生産・奉仕的活動の中に記載されている。小学校・中学校・高等学校のどの校種においても奉仕活動の記載内容は同じであり、「ボランティア活動などの社会奉仕の精神を養う体験が得られるような活動を行うこと。」と書かれている。

また、小学校・中学校・高等学校の内容項目の欄にもボランティア活動などの社会体験を積極的に取り入れる事と記載されている。このころから徐々にボランティア活動が教育的意義を見出したと言っても過言ではないだろう。

よって、ボランティア活動を通して何を得たかを生徒自身に実感させることが、今後より一層重要になってくるだろう。

(5) ボランティアがもたらす効果

ボランティア活動を経験することによる影響について、妹尾は、「人に対しての思いやり」、「活動を通して自分自身が成長できた」や「対象者やほかのボランティアから様々なことを教えられ、勉強になった」などといった、自分自身の成長に関する成果がある³⁾と述べている。特に、若者は、ボランティアを通して得た成果を、「人に対して思いやるのが意識づいた」「活動を通して自分自身が成長できた」「対象者や他のボランティアから様々な事を教えられ勉強になった」といったことがある。

また、同じく妹尾は「活動参加が自発的な意思決定によるかどうかに限らず、ひとたび活動に参加し、その活動を通じて自らの行動の役立ちが実感出来れば、活動に満足し、ボランティア活動を継続することが出来る³⁾」とも述べてある。

(6) 学校を「協働の広場」と位置付けた地域ボランティアの促進

近年、ボランティア活動が活発になり、ボランティア経験のある人が増加してきている。その中で、学校支援地域本部事業の拡大やボランティアコーディネーター制度の導入により学校を活用し、地域と方々児童生徒、教員と一緒にボランティアを行う活動が注目されてきている。学校をフィールドと位置付ける意義としては、個人、保護者、地域団体、NPO など様々な地域の存在にとって共感・協力を得やすいテーマであり、ま

た学校教育の活動はボランティア活動の場を生産しやすいこと、体験活動ボランティア活動支援センターにおいて連携の実績があることなどの点を踏まえ、学校をボランティアのフィールドと位置付け、様々な地域の存在を巻き込んだ地域ボランティアの体制を構築できることである。このような意義を確立させるためには、必要な条件があると考ええる。では、どういったことが必要になってくるのだろうか。

学校と地域が連携することでメリットを生じさせるために必要な点を、文部科学省が2点挙げている。それは「1点目は、学校側の負担の軽減である。現状において、学校をフィールドとするボランティアを促進する上では学校、教師の負担の大きいことが課題となっている。学校ボランティアへの先進的な取り組み事例においても、教師の負担軽減を図る事例が見られている。そして、全国のこれら成功事例の背景には学校とNPOなど地域とが信頼関係を構築できたことが条件といえる。これらの教訓を参考に、体験活動ボランティア活動支援センターを、ボランティアと学校を結ぶコーディネーターとしての役割を果たす存在と位置付け、学校での総合学習、課外活動、放課後などの機会に対して、体験活動ボランティア活動支援センターが、どのようなボランティアの参加が行ないうるかを咀嚼し、各種団体や個人に情報発信、協力の呼びかけを行なうことが想定される。さらにこれらの活動に関心があり、学校と信頼関係が構築できるNPO等の情報を体験活動ボランティア活動支援センターが整理し、学校に利用しやすい形式で提供していくことが必要である。2点目は、学校との連携である。学校が総合学習などの機会に地域の資源や人材を活用したり、逆に地域が学校を支援する上で、相互理解が不可欠である。しかしながら、現状では公立学校の教員は転勤があることもあり地域の実情を必ずしも把握していないことも考えられ、一方で地域も学校の活動については必ずしも把握していない。⁴⁾」と述べている。学校と地域と一緒に活動を行うだけではなく、組織体制を整えたうえで、活動を行う事が絶対条件になってくるであろう。

(7) 学校支援地域本部

これからの教育は、学校だけが役割と責任を負うのではなく、これまで以上に学校、家庭、地域の連携協力のもとで進めていくことが不可欠となっている。そのため平成18年に改正された教育基本法には、第13条に「学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力に努めるのとする⁵⁾」と、学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力の規定が新設された。現在では、核家族化等、子どもたちの取り巻く環境が大きく変化してきている。

そういった中で、学校教育だけではなく、家庭や地域住民にも役割を与え、連携して教育を行っていく必要があるだろう。そういった連携を通じた教育を行っていく体制の一つとして学校支援地域本部が提案された。学校支援本部事業は平成20年度～22年度の3年間、文部科学省から地方公共団体への委託事業として、全国のいくつかの地域が事業を行うモデル地区に指定され、そこで国の事業として十分に予算も与えられ実施されてきた。平成23年度からは補助事業に移行し、予算面でも国、都道府県、市町村が3分の1ずつ補助する事業形態となった。同時に事業としても単独のものとして扱われなくなり、「学校・家庭・地域の連携による教育支援活動促進事業」の1つという位置づけとなった。A中学校は、この学校支援地域本部事業として活動は行っていないが、学校と地域の連携という視点から見ると参考になると考える。ボランティアガイドでは、学校と地域が連携・協力して活動を行っているため、学校側と地域側の役割が必ず出てくるだろう。よりよい学校・地域連携を進めていくには、そうした各役割をしっかりと定めて活動を行っていく事が鍵になっていく。

(8) 研究の目的

本研究では、学校と地域が連携することによる活動の利点と課題を整理する。そして、さらにより良い活動にしておくための方策を探求し、提案していく。ボランティア担当教員と地元のボランティア指導員の方にインタビュー調査を行い、SCAT分析法で得られたデータとボランティア活動日の観察から明らかにしていきたい。

2. 研究方法

(1) 研究対象

兵庫県の市立A中学校の月1回定期的に行われているボランティア活動を研究対象とする。

(2) ボランティア担当の教員と地元のNPO法人の方Bへのインタビュー調査

A中学校のボランティア活動を通して、どのようなことを学んでほしいのか、課題と感じていること活動のメリットに関するインタビュー調査を行った。このボランティア活動の指導を行っている教員1名と活動での直接的指導を行っている地元のNPO法人の方1名を対象とした。

(3) インタビュー内容

インタビューは、1対1で行い、4項目について質問を行った。

- ①活動を通してどのような力を生徒に身に付けてほしいとっていますか。
- ②活動における課題と感することはありますか。
- ③この活動を通して変容したと感じた生徒はいますか。
- ④学校と地域が連携してボランティア活動を行うメリットは何だと思えますか。

(4) SCAT分析を利用する意義

本研究では実地研究校が小規模校であるため、ボランティアに関わっている教員や地域の方、生徒数が少ない。そのため、データでの量的分析では十分に分析が出来ないと判断し、インタビューを基に分析を行う質的データ分析を行った。質的データ分析の代表は、グラウンデッド・セオリーであるが、データを比較するサンプリングの数が限られており、その方法では分析が適切に出来ないと考え、本研究では、SCAT分析を採用した。SCAT分析は、一連の作業（分析と理論化）を進めていく中で分析者が振り返り、再検討していく分析方法である。そのため、限られたデータに対しても、質的データ分析が可能であるとも考えたためSCAT分析を行った。

(5) SCAT分析を用いたデータ分析

SCAT分析とは、(Steps for Coding and Theorization)の略である。分析の手法としては、大谷の論文より、「観察記録や面接記録などの言語データをセグメント化し、そのそれぞれに、<1>データの注目すべき語句、<2>それをそれを言い換えるためのデータ外の語句、<3>それを説明するための語句、<3>そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコードを考案して付していく4ステップのコーディングと、そのテーマや構成概念を紡いでストーリー・ラインと理論を記述する手続きとからなる分析手法である。⁶⁾」とされている。

この手順に則りボランティア担当教員1名とボランティア指導員1名からのインタビューから得られたデータを(1)欄にテキスト中から注目すべき語句を抽出し、(2)の欄にさらに(1)の語句の言い換え、(3)欄に(2)欄を説明するような概念を記入、(4)欄に今までの過程で得られた概念からテーマや概念を作成し、最後にそれらを基にストーリーラインを作成した。

なお、今回の分析では、教員や指導員のインタビューから得られるデータを基に理解し、まとめることが目的である為、理論記述は行わないものとした。

3. SCAT分析を用いたインタビューの分析

SCAT分析から得られたA指導員とボランティア担当教員のストーリーラインをイタリック体の太字で記載している。イタリック体に続き、各項目の筆者の考察を記載している。

(1) 地域のA指導員・ボランティア担当教員へのインタビュー調査

(質問①) 活動を通してどのような力を生徒に身に付けてほしいとっていますか。

B指導員： この活動を通して身につけさせたい力は2点ある。

1点目は、自分の住んでいる町の歴史や伝統を自分の言葉で相手にわかりやすくたくさんの人に伝えられるようになってほしいという点である。その際、自分が理解せず教えられたことだけを相手に伝えるのではなく、自分なりに解釈し、的確に伝えられるような力を身に付けてほしい。

2点目は、言われたことを鵜呑みにするのではなく、背景を考えたり、疑問を持ったりするなど、様々な視点から考える力を身に付けてほしい。これらの力は、ガイドボランティアの特徴でもある様々な年齢の方との交流や観光客との教え・教え合うといった活動の中で身につけていくと推測している。

ボランティア担当教員： 身につけさせたい能力の1つ目は、初対面の人や年上の人、また、年下の人と一緒に会話が出来るというコミュニケーション能力である。このコミュニケーション能力は決められたことを話すのではなく、相手の意表を突く質問やたわいもない会話にも対応できる能力の事を指す。2つ目は、地域の重要文化財を誇りに思える自尊心を高めてほしい。文化財の事を深く調べ、他の地域の人に伝えてほしい。これらの能力は、ガイドの中で何気ない会話の中で身につけることができ、重要文化財の庄屋に見学に来られる博識が高い方としゃべることが最もコミュニケーション能力が身につくと推測している。

(考察) B指導員とボランティア担当教員の身につけさせたい力は、主にコミュニケーション能力や地域愛である。地域愛を育てていると思われる活動はいくつかあった。例えば、ボランティアガイドの活動日に、地域の重要文化財を使用して観光客にガイド案

内を行う。地域の重要文化財を自信を持ってガイドしている姿が観察から見られた。また中学校・小学校の総合的な学習の時間においても、地域の町の歴史や文化財を調べるといった活動が行われている。このような活動を通して地域愛を育むきっかけにはなっているだろう。

しかし、生徒に活動で学んだ事や楽しかった事・面白かった事といった質問項目で自由記述アンケートを行った。その結果、2年生と3年生で「1つ1つ成功していくと達成感があるので楽しい」「初対面の人でも話が出来るようになった」「意外と知識が増えた」などの自身の能力アップの実感に繋がっていると記述した生徒の数は変わらなかったが、「文化財の知識が増えた」「歴史に詳しいお客さんが資料には載っていない豆知識を教えてくれたりして面白い」などの文化財に関する知識に関する記述は、3年生は多く、2年生は少なかった。この地域というキーワードの記述の数の差が出た要因の1つとして、新聞やテレビの取材の要因が大きいと推測した。近年A中学校の取り組みが注目されるようになり、新聞やテレビの取材などで多くの方に認知されるようになった。その取材を受けている生徒は3年生の生徒が多い。そのため、3年生の地域に関するキーワードが高い要因は取材を通して地域への貢献等を確認・実感しているのではないかと考えている。取材の中でも取材を受けた3年生全員が地域への貢献を実感している事を話していた。毎年テレビや新聞の取材が来るのは難しい。そのため、来年度の2年生の地域愛や貢献度等を実感させ、どう向上させていくかが課題になってくるであろう。そのためには、マスメディア以外での実感に繋がるような取り組みが必要になってくる。

課題を解決するためには、生徒が地域愛を育み、貢献度を実感できるような機会を学校と地域、教育委員会が連携して作っていく事が必要になってくる。具体的には、活動の振り返りの時間を多く設けたり、中学生がボランティアガイドに関わる必要性を提示し、生徒に伝えていくなどの取り組みが必要になってくると考える。

(質問②) 活動における課題と感ずることはありますか。

B指導員：活動の問題点は、生徒のボランティア活動日にたくさんの観光客に訪問してもらいたいことである。この問題点は、生徒もシニアの方とも共通している問題点だ。終わりの感想でもたくさんの観光客の方が訪問して下さった日は「たくさん来てくれて嬉しい」といった内容の感想を書く生徒がいる。

ボランティア担当教員：活動の問題点は、部活動との日程調整、観光客の数が少ないと

練習だけで終わってしまう事、また人数が少ないという体制の問題が大きい。この問題の解決に向けて活動日の変更やALTを招いたり行っている。もっともっとたくさんの人に周知してもらえようように地域と学校、教育委員会が連携協力することが大切になってくる。

(考察) 活動の問題点としては、観光客を集めるのに一番苦労しているという語りがボランティア担当教員、B指導員2名から出た。この問題点を克服しようと地域と学校、教育委員会が掲示板などを利用してたくさんの人に周知してもらえようように活動を行っている。ボランティア担当教員からの語りから、今後も様々な周知方法を地域と教育委員会と連携して実践していきたいという語りが出た。観光客をたくさん集め生徒に能力を発揮する場の提供をしようとして一生懸命なことがうかがえる。しかし、ここで重要になってくるのが生徒の活動という視点である。生徒の活動という視点で考察していくと、観光客の集客を増やすための取組に、生徒が関わっていない。現在の状況では、地域と学校、教育委員会が集客した観光客にガイド案内をするという形態になっている。そのため、観光客が来ない日は、生徒の「活動したい」という気持ちが満たされず、充実感や達成感の実感に繋がっていないことが分かった。そこで、この観光客の集客活動に生徒も関わる取り組みはいいのではないかと考える。生徒同士が、集客のためのチラシを作成して、どこでチラシを配布するのか、また、どのような形でチラシ配布が可能なかを話し合い、実践に繋げていく活動は、仲間との協力や課題解決に向けてみんなで知恵を出し合い、実践していく力(考える力)の育成にも繋がり、より良い活動になっていくのではないだろうか。ただし、このA中学校のボランティアガイドは部活動ではないため、どこまで実現できるかが確かではないが、生徒が集客活動に何らかの形で関わっていく活動は効果的ではないかと考える。

ボランティア担当教員は、観光客の集客数の課題に加え、生徒の参加人数の少なさも課題を感じている。ボランティアガイドに参加している生徒の中は、部活動に少し気を使って参加しにくい状況がある。また、ボランティアガイドに挑戦してみたいと思っているが、途中からどのように入ればいいのか悩んでいるうちに参加を諦めてしまった生徒もいることが分かった。筆者がボランティアガイドの様子を観察した際、1年生からガイドの勉強を行い、活動に参加していなければ、途中から参加していくことが困難だと感じられた。確かにA中学校は、小規模校であることもあり、ボランティアガイドに

参加する生徒数にも限りがある為人数確保は難しい。しかし、人数を確保しようとする
と、部活動ではなくあくまでもボランティア活動であるため、教員から生徒に参加を促
すということは意味合いが変わってくるであろう。人数確保という問題は、今後さらに
難しくなっていく課題であろう。

また、上記の観光客の少なさ以外にもA指導員は、小さい問題であるがこんなことも
語っている。以下がA指導員のストーリーラインである。

B指導員: *大きい問題はないが、1つ挙げるとしたら間違っただ情報を得てしまっている
時があることである。様々な人がいる中で指導の方法の違いによる内容のず
れや生徒の解釈の仕方、また、先輩から受け継がれた情報にギャップがある。
そして、それを伝える時に自分で理解していないと間違っただ情報をお客様に
伝えてしまう。その修正をどう行うかが現在の問題点である。*

複数いるガイド指導員の方によっても指導方法が違う。違うことによって生徒の捉
え方も当然変わってくるだろう。その修正をどのようにするかを問題視しているが、今
年からはこの問題に対しての解決策を展開している。B指導員も「この活動は部活動で
はないので、学校側に求めるのは意味が違う。あくまでも学校と地域との交流である」
と述べていた。語りからは、ガイドの指導は、地域のガイド指導員の役割であるため、
学校側にどこまでの要望が出来るのか悩んでいるような様子が見受けられた。部活動と
の兼ね合いがあり、また活動日が隔月であるため、ガイド内容の共有や指導の徹底が出
来ない点から生徒に伝える困難さを感じているのであろう。文部科学省も、「学校に対
して責任ある意見を述べる制度については、学校側、地域住民側の双方に抵抗感がある。
⁷⁾」と述べている。このような課題は全国共通して同じであることが分かる。解決の打
破には、双方が話し合う場を設けたりする機会を設けることで、双方の遠慮の取り除き
や情報の共有につながるのではないだろうか。A中学校の場合は、あくまでもボランテ
ィア活動という形態なので地域側が、学校側に要望を行うのは確かに抵抗がある。しか
し、語りの中で、B指導員の方の今後このボランティア活動をどう展開していきたいか、
また活動を有意義なものにするためにたくさんの方策を考えていることが分かった。そ
の意見をどう反映していくかが今後のポイントになってくると考える。

(質問③) この活動を通して変容したと感じた生徒はいますか。

この質問項目に関しては、B指導員とボランティア担当教員の両方が同じ生徒（生徒C）を挙げていた。以下がボランティア担当教員のストーリーラインである。

ボランティア担当教員：1人目は、3年前の男子の卒業生である。その生徒はアイコンタクトが出来なく、クラスでも無口で、男子と関わるのが苦手な為、物静かな女子生徒と学校生活を過ごしていた本当に人と話をするのが難しい生徒であった。そのような生徒が3年間ボランティアガイドを続けることで自信をつけていき、高校入試も面接試験で合格していった。高校入学後も、高校紹介の新聞でもその男子生徒が大勢の人前でプレゼンをしている写真が掲載されていた。

「特に変容したと思われる印象的な生徒は」という質問をした。ボランティア担当教員からは複数の生徒が挙げられたが、1番初めに挙げられた生徒は、両名とも同じ生徒Cであった。このボランティアガイドに参加する生徒は、比較的人前でしゃべることが得意な生徒が参加してくるそうだが、生徒Cは印象に残るほど人前でしゃべることが苦手な生徒であったそうだ。1年生の時と3年生の時の姿が大きく違うため、特に両名とも印象に残っていると語っていた。この変容をもたらした大きな要因として2つ考えられるのではないかと推測した。

1つ目は、「褒める」「認める」といった指導方針を展開していることである。そのため生徒の「自信」に繋がっている。このことについては、B指導員・ボランティア担当教員両名とも同じように述べていた。この活動では、どんな場合であってもまずはその生徒の良い所や1日でよかった点を挙げるような指導方法をとっているそうだ。休みがちな生徒に対して学校では、その生徒に寄り添う姿勢で臨むことはあるが、「褒める」「認める」という関わり方をする機会は多くはないだろう。そういった背景を踏まえると活動の指導方針が大きく寄与したのであろう。

2つ目は、役割を与えられていることである。学校生活の中でも係活動などで役割を与えられることは多いが、そのほとんどが複数で行う。しかし、ボランティアガイドのように1人で自身の住んでいる町を観光客にガイドすることで多くの人の役に立っていると実感することが出来たのであろう。B指導員とボランティア担当教員の方のインタビューの中で何回も「自分の居場所を見つけたんだと思います。」と語っていた。こ

の活動において「居場所」というキーワードが特に重要になってくるということをインタビューを通して実感した。杉本・庄司は、「居場所」の心理的機能として「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「思考・内省」「自己肯定感」「他者からの自由」の6つの因子からなっている⁹⁾と述べている。今回の2名の語りから生徒Bは特に、「どんな場合でも褒める指導」や異年齢の方との交流、地域の方の生徒Bに対しての温かい声掛けをしてもらえるという関わり方を通して、自分を受け入れてくれる他者がいると感じる「被受容感」と無理をしないで本当の自分でいられる状態「精神的安定」を強く実感することが出来たのではないかと推測した。そして、ガイドという役割を与えられるということで「自己肯定感」の獲得に繋がったのであろう。これらの過程を経て最終的に自信を徐々に獲得していったのであろう。そして、高校進学後も、人前でプレゼンテーションが出来るまでの能力アップに繋げることが出来たと考える。

ボランティア担当教員の語りの中では、上記の生徒C以外にも生徒Dの変容も印象的であると述べている。この生徒も生徒C同様おとなしい性格であったが、学校を休む回数が生徒Cよりも少し多かったそうだ。学校を休む理由として特別な理由はなかったそうだが、言われたことが気になってしまったりする傷つきやすい生徒だったそうだ。しかし、その生徒もボランティアガイドを3年間続けることにより「自分の居場所」を見つけ「自信」に繋げることが出来ている。1・2年生は、学校を休みがちであったが、3年生に入ってから、ボランティアガイドでの自信が学校生活でも生かせるようになり、学校を休まなくなるまでに至っている。そして、最後は生徒会にも立候補するまでに成長したそうだ。このように、ボランティアガイドで自信をつけてから学校生活に生かしていく変容を見せたのは、比較的男子生徒が多い傾向があることが分かった。

ボランティアガイドを通して何事も積極的に物事に関わろうとしている生徒の事例も出てきた。将来世界的にも有名なハーバード大学に行きたいというある女子生徒は、語学力を高めるために、昨年から英語のガイドに挑戦している。また、去年の3年生のボランティアガイド参加者は女子生徒6人であったが、そのうち4人が生徒会に立候補し、学校の代表として頑張っていた。今年の2年生に関しても、生徒会に立候補者の約半数がボランティアガイドの参加者である。生徒会以外でも文化部所属の生徒は文化発表会でパートリーダーを担当したり、クラスの全員の前でアドバイスをしたりと活躍している。このように人の前に出て、リーダー的役職にチャレンジしてみようとする生徒の事例も見られた。

(質問④)学校と地域が連携してボランティア活動を行うメリットは何だと思いますか。

B指導員：1番の利点は、世代間交流を通じた異年齢のふれあいである。核家族化されてきた現在は、おじいちゃんやおばあちゃんとの交流があまりなくなっている。しかし、個々の活動では、様々な年齢の方との関わりが出来ている。

ボランティア活動を行うメリットについてB指導員は、異年齢交流だと述べている。核家族化が進んでいっている中で、シニアガイドの指導員の方や観光客で来られる方々との関わりが持っていることが生徒にとって大きな利点でもあり、この活動の最大の利点でもある。ボランティア担当教員の語りの中で、生徒同士のコミュニケーション能力が高い生徒はたくさんいる。しかし、社会で生き抜いていくためにはいろいろな年齢の方とのコミュニケーションや関わり方が非常に大事になっていく。言い換えればこの活動で社会で生き抜く力を身に着けているとも言えるだろう。

また、ボランティア担当教員は異年齢の交流に加えて以下のような語りをしている。

ボランティア担当教員：この活動の機会を提供してくれている地域の人に憧れをもったりしていく内に、地域愛が芽生え自尊心が高まっていく。このようにボランティアガイドを通して地域と生徒の双方の関係性が構築されていくところが1番の利点である。

生徒が活躍する機会を地域の方が提供してくれることを生徒自身を感じていることも活動の利点であると語っている。地域の方が生徒に活動による達成感や満足感を感じてほしいと試行錯誤しながら活動を展開する姿を見て、地域の人に対して憧れを持つようになる。その憧れがやがて地域愛に繋がり自尊心に繋がると述べている。実地研究中においても、地域の方の家族が、中学校に在籍していないにも関わらず、学校行事（体育大会や文化発表会）に来て、ガイドボランティアに参加している生徒の姿を見に来られている姿を観察した。学校と地域とが関わることで地域の方が学校に興味を持つようになり、学校に参画してくれるようになる。ここからも地域の方と生徒の双方の関係性が出来ており、まさに「開かれた学校」の機能を果たしていると言えるのではないだろうか。

(3) 活動の利点と今後の可能性

活動の利点としては以下の点が挙げられる。

①コミュニケーション能力の育成と対応力の育成

ここで育成されるコミュニケーション能力の育成は、目を見て会話をすることが出来るなどの対人的な能力に加えて、自身が予想もしていなかった質問に対しての対応力である。生徒が行うガイドは、県重要指定有形文化財になっている有名な建物である。そのため、見学に来られる観光客は、その建物に興味のある博識の高い方が多い。その際、ガイドをするだけでなく観光客の人から質問を受け、中には、ガイド内容の間違いを指摘されることがある。そのような咄嗟の受け答えの対応の仕方を、ガイドを行う中で学んでいる。ある日の活動日の観察で、観光客の人が女子生徒に対し「君のガイドは間違っているよ。その根拠はどこにあるんだ。」と言われている場面があった。しかし、その生徒は質問の答えとして「すみません、勉強不足のところがありました。次回までには修正してきます。」と答えていた。このようにガイドという活動から色々な質問や指摘が生徒に投げかけられることで、返答の仕方の対応力を身に着けている。また、何人かの生徒は、難しい質問に対しても身振り手振りも交えて観光客に伝えていた。普段の学校生活での生徒間同士のコミュニケーション能力が高くても、初対面の様々な年齢層の方とのコミュニケーションが高いとは限らない。ボランティア担当教員の先生も言っていたように、「社会に出て役立つコミュニケーション能力の育成」が出来ていると考える。

②異年齢の方へのガイドの成功体験が自信になり、何事も積極的に関わろうとする態度の育成に寄与。

前述したように、ボランティアガイドに参加している生徒は、学校生活でも生徒会に挑戦したり、文化発表会の際にパートリーダーに立候補したりする生徒が多い。その要因の一つとして、観光客で来られる様々な年齢の人へのガイドの成功体験と「どのような場面においても褒める」指導であると推測した。B指導員やボランティア担当教員の語りの中でも特に大きく変容したと述べていた生徒C・生徒Dの2名の生徒は、学校生活では、積極的でない生徒であったが、ボランティアガイドでの成功体験や褒められた経験を経て自信をつけ、学校生活でも、その自信を生かせることが出来ている。生徒とボランティアガイドの話をした際も、初対面の方へのガイドで「出来た」という成功体験が何よりも嬉しいと多くの生徒が述べていた。

③地域と学校が協働しながら生徒を育成

学校と地域が連携協力してボランティアを行う事で、学校の授業・行事等で地域の住民が参画しやすいことや地域資源の活用の促進というメリットに繋がっている。A中学校の文化祭や体育祭などの学校行事にボランティア指導員の方が、足を運んで生徒に声をかける場面を目にした。B指導員も、「このように地域と学校が日ごろから交流を行っている」と学校へ足を運ぶ回数も増え、何よりも中学生が頑張っているのだから私たちも何か力になろうと思う」と語っていた。地域の方がこのような思いを抱いていることで、A中学校では、地域資源を活用した授業展開が出来ている。このように学校と地域とが交流する機会を作ることで、生徒や学校側と地域の双方にメリットが生まれる。この連携協力こそが、今後重要になってくる「開かれた学校」のモデルになっていくだろう。

④居場所作りに寄与

ボランティアガイドの活動が、学校生活に自信を持ってない生徒の居場所づくりに寄与することも分かった。前述したようにこの活動では、自分を受け入れてくれる他者がいると感じる「被受容感」と、無理をしないで本当の自分でいられる状態「精神的安定」そして、ガイドという役割を与えられ、出来ると褒められるという過程で「自己肯定感」の3つの要因があると考えられる。特に「被受容感」と「精神的安定」の実感に繋がっているという場面が活動の観察の中からいくつか観察できた。ボランティアガイド指導員の方と生徒との関係性が、祖父母と孫のような家族的な関係性と類似しており、上述した効果や居場所づくりに繋がっているのではないかと推測される。生徒Bも卒業の際「俺の居場所はここやった、もっといろんなことを教えてほしかった」と答えたそうだ。これはあくまでもA中学校の1つのケースであるが、学校外で地域の人と関わることで、学校生活に自信が持てない生徒への居場所づくりに寄与することが推測される。

⑤今後の可能性

ボランティアガイド活動中の観察やA指導員又ボランティア担当教員からのインタビュー調査から、前述したような効果が得られることが出来るのではないかと推測した。しかし、生徒側と地域側の課題が出てきた。生徒側の課題として、活動に満足している生徒と活動に満足していない生徒がいることが分かった。その原因の一つがガイドという活動に限定されていることではないかと考えた。また、活動日に観光客がたくさん来場されないという問題である。これらの課題に関しては、学校と地域が解決に向けて

様々な取り組みを行っている。しかし、その活動に生徒が参加していないのである。満足度が高かった生徒の取り組みを見てみると英語でのガイドを行っている生徒数人は満足度が高かった。このことから、従来のガイド限定という活動だけでなく、新たな取り組みを行う事で生徒の活動に対する満足度が上がるのではないかと考えた。その新たな取り組みとして、生徒も参加する集客活動が良いのではないかと考えた。そのため、ガイドに加え、集客活動に関わる活動を組み込んだ年間活動計画を提案し、新たな可能性を模索した。以下に年間活動計画を示す。

表 1 年間計画 (例)

活動前：参加していない生徒に告知をする。

(伝える内容)

- ・活動内容 ・活動の大まかな概要
- ・現在参加していない2年生、3年生も参加できる

4月：ボランティアガイドの概要の説明

活動の意義、身につけさせたい力の確認、A中学校の生徒がボランティアガイドを行う必要性の提示、活動の概要の説明。

5月：観光客を集めるための宣伝方法等の話し合い。

(話し合い内容)

- ・役割分担 ・ポスターにするのか、チラシにするのか
- ・どこに貼るのか ・配布手段（教育委員会に渡すか、地域に渡すか）
- ・どのような配り方か
- ・宣伝内容（行事の告知と合わせるのか、A中学校が行っているボランティアガイドのみの宣伝告知をするのか）

6月：宣伝方法の実践。宣伝チラシの作成

7月：宣伝チラシの配布、シニアガイドの指導の下、ガイドの練習・ガイド実施。

8月：シニアガイドの指導の下、ガイドの練習・ガイド実施。

9月：シニアガイドの指導の下、ガイドの練習・ガイド実施。

(振り返りの視点)

- ・ガイドを行ってよかった点 ・ガイドの修正点や反省点
- ・修正点や反省点を次はどのように克服していくか

・今年度行ってきたガイドの感想。・来月以降行ってみたい活動

10月：播磨地方が祭りであるため、観光客が少ない可能性がある。午前と午後のどちらかで宣伝活動の振り返り、改善案の作成。

(宣伝活動の振り返りの視点)

- ・ 宣伝方法の内容の確認
- ・ 人目につくようなポスターやチラシになっていたか
- ・ 宣伝告知の再検討・役割分担の再構築

11月：林田まちなかあるきを含め多くのイベントが開催されるために観光客が多く来られる可能性が高い。ガイド活動に専念。1年生ガイドデビュー。1年生ガイドの振り返り

(1年生の振り返りの視点)

- ・ ガイドを行っての感想
- ・ ガイドを行ってよかった点 ・ ガイドを行って反省点や改善点
- ・ 反省点や改善点をどう克服していくか

12月：「灯りの祭典&ふれあい冬まつり」が開催されるため、多くの観光客が来場する可能性が高い。ガイドに専念。

翌年2月：ガイド、1年間を通しての活動の振り返り、次年度に向けた話し合い。

(振り返りの視点)

- ・ 今年の活動でよかった点と反省点
- ・ 反省点を来年度どう克服していくか
- ・ 来年度新たに取り組みたい活動や挑戦してみたい活動

このように筆者なりの年間活動のスケジュールを立てた。部活動の試合や学校行事の都合上変動するかもしれないが、生徒の活動をメインに考えていく事が、さらにボランティアガイドを発展させていく事に繋がるであろう。その生徒の活動は、ガイドに加え現在は、観光客集客活動であると考え。観光客集客に向けて生徒間での役割分担をし、生徒同士で話し合いを行い、実践することで新しい取り組みを生徒自ら作り上げていくことが、満足度の向上につながるのではないかと考える。また、B指導員が語っていた身につけさせたい力の1つ「考える力」の育成にも、この観光客集客活動は繋がるのではないかと考えている。

また、ガイドの年間活動の真ん中の位置に相当する9月に今年度のガイドを行っての

感想と来月以降行ってみたい活動を生徒に自由記述させる計画を立てた。この狙いは、1つ目に生徒のガイドについての正直な気持ちを知ることである。2つ目は、その生徒の思っていることや気持ちを受けて、今後の活動運営の修正などを行っていく材料にすることである。そうすることで活動全体の振り返りも出来て、生徒の意見を組み込むことが出来た生徒・学校・地域と共に作り上げていく活動になっていくのではないだろうかと考えている。

上記の課題以外にも、部活動の試合等も重なり活動日に多くの生徒が参加できない課題も明らかになった。日程調整を含めた参加人数の確保は、部活動との試合の兼ね合いもあり難しい課題になってくるのであるが、その中でも部活動に気を使ってしまい参加出来ないでいる生徒の問題に関しては対策等が可能であろう。例えば、あくまでも部活動が優先であるが、ボランティアガイドに参加したいと言えるような部活動体制を整えることや、職員朝礼などで今月の活動日を伝え、日程調整等に努めるなどの少しの配慮は可能ではないだろうか。部活動が主であるが、生徒が遠慮することなくボランティアガイドに参加できるような体制を整えることが必要になってくる。

4. 総合考察と今後の課題

本論では、インタビューを通して、学校と地域が連携・協力して活動を行うことで生まれるメリットと今後の可能性という視点で研究を行った。近年「開かれた学校」作りが重要視されている中でA中学校の取り組みは、今後の教育活動の1つのモデルとなっていくだろう。本研究のA中学校における学校外の活動を通して、学校生活では自身の能力をなかなか発揮できない生徒の能力を引き出すことに寄与し、自信をつけさせチャレンジ精神を育むことが出来ている点において生徒個々の可能性を伸ばすという面において、学校外活動は貢献している。しかし、今回の研究では、学校・地域・生徒にとっていくつかのメリットが生まれていることが分かった反面、活動に満足している生徒と満足していない生徒の二極化という新たな課題や指導方法の違いから生じる生徒個々のガイドの内容の違い、地域の指導員の方の遠慮などによる活動方針などの情報の共有が充分に出来ていない課題等が明らかになった。このA中学校のボランティアガイド活動を発展させていくためには、2点の取り組みが重要になってくる。

1点目は、学校と地域の融合された組織体制の確立が必要不可欠であると考え。前述したがこの活動は部活動ではない為、時間的な制限もあり運営が難しい部分もある。

しかし、組織作りを行う事で活動の発展が見込めるのではないかと考えている。インタビュー調査から地域の方は、このボランティアガイドが部活動ではないという認識がある為、問題が生じた場合学校側にも対応を依頼したりなどは行っていない。確かにあくまでも地域と学校の交流ではあるが、今後の「開かれた学校」の構築という視点で見ると学校と地域との融合された組織作りが重要になってくる。このような困難さを解消する解決策の1つに学校支援地域本部事業の組織体制が参考になってくるのではないだろうか。この学校支援地域本部事業で最も参考にしていきたいところは、コーディネーター役が存在し、学校・生徒・地域の方の三者が話し合う場を設ける等の組織作りが出来ている点である。A中学校の組織体制はこのコーディネーター役の存在が完全に確立していない為、学校・地域・運営協力団体との意見交換の場もなく、活動の方向性のばらつき等が出てきているのではないかと推測している。このコーディネーター役は転勤がある教員よりも、地域の実態などを知っている地域住民の方が最適であろう。コーディネーター役が基礎となり学校と地域とが融合した組織作りを展開することでより一層効果が生まれる「開かれた学校」作りが出来るのではないかと考えている。

2点目は、情報を共有する場の設定である。A中学校も情報共有の場の1つとして、ガイドボランティアのガイド建造物の勉強会を、A中学校内で夏休みに行っている。しかし、そこに地域の方は参加していない。ガイドの内容が生徒個々に違いが生じていると言う課題があったが、このような全生徒が集まる場で代表者が説明解説を行う事でガイド内容の統一化は可能ではないだろうか。ガイド内容等の確認を行う情報共有の場を設定することで、B指導員の挙げる問題点の改善が出来ると考える。地域側は、現在、学校と地域との「交流」という考えが強いが、それに加えて、「連携」という視点も、少し組み込んでもらいたい。あくまでも上記の2点は提案である。現在、このボランティア活動を発展していくために、学校と地域がアイデアを出し様々な取り組みを展開している。そのため、今後さらなる活動の発展が期待される。本研究で取り上げたA中学校の地域連携の取り組みが、今後の「チーム学校」としての1つのモデルとなることを期待する。

今後の課題としては、地域と学校が連携して活動を行う事で、変容した生徒の事例はいくつかあったが、「対象生徒が変容できた要因」「学校生活と学校外活動での気持ちの変化はあったのか」などといった対象生徒の気持ちについて、心理的な知見から十分に検討できていない。それらの心理的な部分を追求していくことで、上述した効果以外の

学校外活動が生徒に与える影響や可能性について明らかにすることができるのではないだろうか。さらに、生徒に対する適切な関わり方や、望ましい組織体制が模索することができるのではないかと考える。

引用文献

- 1) 厚生労働省「ボランティアについて」平成 14 年
www.mhlw.go.jp/shingi/2007/12/dl/s1203-5e.pdf (平成 28 年 10 月閲覧)
- 2) 寺山節子「ボランティアが及ぼす教育効果の実際—学生の主訴を中心に—」『中国学園紀要』2008 年、95-99 頁。
- 3) 文部科学省「資料 1-2 新学習指導要領における体験活動に関する記載」平成 23
www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/.../1301827.htm (平成 28 年 11 月閲覧)
- 4) 妹尾香織「若者におけるボランティア活動とその経験効果」
『花園大学社会福祉学部研究紀要』2008 年、35-42 頁。
- 5) 文部科学省「5-1 体験活動ボランティア活動支援センターを中心とする地域支援体制の構築」平成 21 年
www.mext.go.jp/a_menu/shougai/houshi/.../1369187.htm (平成 28 年 11 月閲覧)
- 6) 文部科学省「教育基本法」平成 18 年
http://www.mext.go.jp/b_menu/houan/an/06042712/003.htm (平成 28 年 11 月閲覧)
- 7) 文部科学省「資料 2 『新しい公共』型学校の創造について 平成 23 年
www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/.../1301802.htm (平成 28 年 12 月閲覧)
- 8) 大谷尚「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 S C A T の提案
—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—」
『名古屋大学大学院発達科学研究紀要』第 54 巻第 2 号 2007、27-44 頁
- 9) 杉本希映・庄司一子「『居場所』の心理的機能の構造と発達的变化」
『教育心理学研究』2006、289-299 頁

番号	発話者	テキスト	(1) テキスト中の注目すべき語句	(2) テキスト中の語句の言い換え	(3) 左を説明するようなテキスト外の概念	(4) テーマ・構成概念
1	聞き手	ではお願いします。まず、1つ目の質問です。こちらの三木家の指導員の方が林田中学校の生徒にこの活動を通してどういった力を身につけさせたいのか。そういうのがありましたら教えてください。				
2	A指導員	あの、大まかに言ってしまうと自分たちの住んでいる林田がどうい歴史があるのかというのをまずは知ってもらいたい。	歴史、知ってもらいたい	住んでいるところ、時代の流れ、認知	地元、伝統、伝承	自分の住んでいる町の歴史や伝統を伝えていく
3	A指導員	それと合わせて、これだけのものが残っているということは、これまでにもかなりの人が関わってきて、いまこのような状況になってきている人々に見てもらっているという状況を自分の口でいろんな人に伝えてほしい。	これだけのもの、かなりの人、見てもらって、自分の口、伝えてほしい	素晴らしいもの、多くの人、知ってもらって、自分の言葉、教えてほしい	素晴らしい歴史や建築物、たくさんの人、認知してもらって、自身の使命、伝承	素晴らしい歴史や建築物をわかりやすく自分の言葉でたくさんの人々に伝えてほしい。
4	A指導員	そして、伝えることによって、結局は、自分が分かっていないと、ほかの人に伝えるということではできません。表面的な言葉だけになってしまうので、で、そういういろいろな方向から考	自分が分かっていない、伝えられない、表面的な言葉、いろいろな方向から考える、身に着ける	自分が認知、伝承出来ない、分かりにくい言葉、的確に伝える、多様な見方、習得する	理解、説明できない、あいまいな言葉、的確に伝承する、多様な視点、自分のものにする	自分が理解できていないとあいまいな言葉の表現になってしまい的確に説明できない、いろいろな方向から考えを導く柔軟性を養う必要がある。

番号	1~41
ストーリーイン	<p>この活動を通して身につけさせたい力は、2点ある。まず1点目は、自分の住んでいる町の歴史や伝統を自分の言葉で相手にわかりやすくたくさんの人に伝えられるようになってほしいという点である。その際、自分が理解せず教えられたことだけを相手に伝えると上手く伝えることが出来ない。そうではなく、自分なりに解釈し、的確に伝えられる力を身につけてほしいと思っている。</p> <p>2点目は、言われたことを鵜呑みにするのではなく、背景を考えたり、疑問を持ったりするなど、様々な視点から考える力を身につけてほしいという点である。これらの力は、ガイドボランティアの特徴でもある様々な年齢の方との交流や観光客との教え・教えあうといった活動の中で身につけていくと推測している。</p>
理論記述	
さらに追及すべき点・課題	

(appendix2) ボランティアガイドを行おうと思ったきっかけ。(アンケート調査)

2年生	<ul style="list-style-type: none"> ・内申点が上がると聞いたから。 ・兄弟がやっていたから。 ・親に勧められたから。 ・友達がしているし、ガイドがやってみたかったから。 ・楽しそうだったから。
3年生	<ul style="list-style-type: none"> ・三木家について知りたかったから ・歴史に興味があったから。 ・林田の事をもっと知りたかったから。 ・欠点の克服をしたかったから。 ・先輩に誘われたから。 ・林田の知名度を上げるため ・疑問を解消するため。 ・人と接したり、話したりするのが好きだから。 ・ガイドそのものにあこがれがあったから。

(appendix3) ボランティアガイドを経験して良かった事・面白かった事。

(アンケート調査)

2年生	<ul style="list-style-type: none"> ・相手が笑ってくれること。 ・別になし。 ・お客さんに逆に教えてもらうことがあること。 ・英語ガイドした際、お客さんが相づちしてくれたこと。 ・褒められたこと。 ・意外と知識が増えたこと。 ・お客さんが来なければ役に立たないので面白くない。 ・ガイドの勉強をすること。 ・季節の物を見れる。 ・積極的に話せるようになった。
-----	--

3年生	<ul style="list-style-type: none"> ・笑顔でお客さんが帰っていくのを見て、うれしかった。 ・1つ1つで成功していくと達成感があるので楽しい。 ・人とのつながりにより知識が増え、他者と話をしたり、ガイドのときの談話などで役立つ。 ・ガイドを行う前よりもトーク力が身についたり、協力するようにもなった。 ・三木家の秘密が毎回わかるのが面白い。 ・初対面の人でもガイドすることで気軽に話しかけられるようになった。 ・ボランティア指導員の方とも仲良くなれ、学校の帰り道などで声をかけてくれたりしてすごく嬉しい。 ・歴史に詳しいお客さんが資料には載っていない豆知識を教えたりして、会話が弾み面白い。 ・質問や会話の仕方が少し上手になった。 ・いろいろな方とコミュニケーションを取ることで出来るので、様々な話を聞くことができた事。 ・初対面の人でも話が出来るようになった。 ・貴重なものをたくさん見た事。
-----	---